

私たちの母校、「弘前学院聖愛中高」は、1886年（明治19年）に弘前メソジスト教会の中に十数名の生徒で誕生しました。創立者は英語を学ぶために横浜に派遣された元藩士、本多庸一です。彼は横浜で宣教師のブラウンやバラに学び、感化を受け、1872年（明治5年）キリスト者になりました。郷里弘前で、母校の藩校「稽古館」をキリスト教主義学校・「東奥義塾」として再興することに尽力し、その後、女子のために女学校を作ったです。

津軽はキリスト教の伝道地となりました。本多庸一は「青山学院」の日本人初の校長となりました。青山学院は青森学院(?)と見まがうほど、津軽出身の院長を何人も擁してきたのです。本多庸一は、17年間働いた後、日本のメソジスト教会の初代監督となりました。私の父は本多庸一の孫、宮之原右近氏の青山学院神学部の一年後輩であり、彼をととても尊敬し、親しくさせていただいておりました。彼の戦死を父はどれだけ嘆いたかわかりません。

私の友人は母校で初めてキリスト教に触れ、心の飢え渴きを潤され、信仰の道を歩む決意をしたのです。関係の深い青山学院に進学したと言うわけです。母校への限りない感謝をいつも口にしています。そういうわけで今回の旅行は彼女のたっでの希望でした。



記念式典の朝は快晴でした。市民ホールには生徒、学生、現・旧教職員、卒業生、関係者、来賓が集いました。賛美歌「心を高く上げよ！主の御声に従い ただ主のみを見上げて 心を高く上げよう」を歌いました。このように生きたいと願いながら。聖書「私はぶどうの木、あなた方はその枝である」(ヨハ15:1-5)を読み、130年間の神の導きを感謝して祈りました。来賓は母校が人間教育に邁進したことを祝されました。尽力して下さった方々に感謝を捧げ、吹奏楽部の伴奏でハレルヤ・コーラスを歌いました。懐かしい制服を着た可愛らしい在校生と共に校歌を歌うのは何とも言えない喜びでした。また、多くの男子学生がいます。男子が加わったことで、母校は幅が広がります。彼らならではの個性や力が花開く

ことでしょう。式典後にYWCAの先輩方にお会いし、挨拶を交わせたのも喜びでした。

それは、からし種に似ている。人がこれを取って庭に蒔くと、成長して木になり、その枝には空の鳥が巣を作る。(ルカ13:19)まさに聖書の言葉のように、母校は1500名ほどの学生が在籍するほどに、成長しました。この根本に篤いキリスト教信仰があったのです。創立者たちの祈りに合わせて働いてきた先達の心を大切にしたいと思いました。友人と、自分が受けた恩恵を感謝するだけでなく、後継者を育てることが責任、使命、課題だと語り合いました。

後日、弘前在住の先生から地方紙「陸奥新報」が送られてきました。なんと私たちの写真が新聞の17面のトップ記事を彩っているではありませんか！びっくりするやら、恥ずかしいやら。それでも式典参加の堂々たる証拠となりました。

